



第4章

芝生を張ろう

この章では、芝生を張る手順や方法を御紹介します。
芝の種類や張る時期、既存の土壌の状態などにより
作業や手法が異なりますので、現地に合った張り方を選んでください。

芝生が育ちやすい基盤作り(土壌整備)

芝生を生育させるには、芝生が育ちやすい基盤を整える必要があります。

芝生が育ちやすい土壌

- 石や瓦礫が無く、根が張り、伸びやすいように適度に軟らかく養分を含んでいる。
- 客土は弱酸性か中性で通気性・排水性が良い、もしくは改良されている。
- 土壌表面は平らに整地されている。
- 根が張りやすい生育層が確保されている。

既存基盤の整備

【すき取り】

既存の土壌表層を機械を使って取り除く



【^{こうらん}耕耘】

土を掘り返したり反転させたりして耕す



土壌の改良

【客土搬入】

排水性の良い良質な床土を加える
(黒土と砂の混合土など)



【生育層】

根の張りを考慮し、
15cm以上が望ましい



【土壌改良資材】

通気性、排水性を改善するため、
生育に必要な栄養を土壌に補給する



土壌の整地

【^{なら}均し】

レーキ等で地盤を平らに整える



【^{なら}転圧】

機材を用いて土壌を均一にならす



芝生が育ちやすい基盤作り(給排水設備)

良好な土壌基盤と同時に給排水設備も整えておきましょう。

給排水設備の整備

- 【表面排水】土地に傾斜をつけて排水溝・集水ますへと排水を誘導する方法。
- 【地下排水】地下に管を引き、地表の雨水を管に浸透させて排水を促す方法。
- 【給水設備】地下に給水管を通し、適所に散水栓を設置する方法。
(スプリンクラーやホース等で地表に散水する)

表面排水

【排水溝】



【集水ます】



地下排水

【地下浸透管】



【地下浸透管設置】



給水設備

【表面散水装置】(ポップアップスプリンクラー)



【地下給水管】



芝生の植付け

芝生の育ちやすい環境ができたなら、次は芝生を植える作業です。

芝生の植付け方法

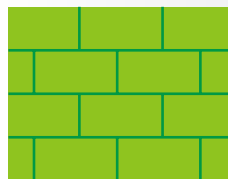
- 芝生の植付け方法は芝生の種類や性質に応じて、主に張り芝、播種、ポット苗がある。
- 主にコウライシバ、ノシバでは張り芝での施工が多く用いられる。
- 主に冬芝(ライグラス等)では播種での施工が多く用いられる。
- 主にバミューダグラス(ティフトン芝等)ではポット苗での施工が多く用いられる。

張り芝

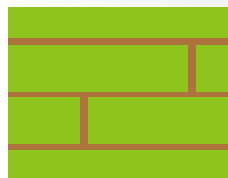
切り取った芝を
並べて敷き詰める方法



工法のいろいろ



- 切り芝(約30×37cm)の
ベタ張り(隙間なく敷き詰める)
⇒雑草が生えにくく、
養生期間が短縮される



- ロール芝(約37×135cm)の
目地張り
(隙間を空けて芝を並べる)
⇒芝生の枚数の節約ができる

播種 (種まき)

芝の種をまき、
発芽によって芝生を造る方法



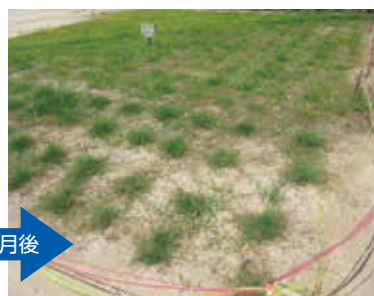
- 主に冬芝の施工や、オーバーシードに用いられる。
- 手持ち型の散布機、手押し式の散布機を使うとムラになりにくい。
- 冬芝の場合、種まきの時期は9月中旬～10月初旬または3～5月が目安。【種の目安:4kg/100㎡】
- オーバーシードの場合、夏の高温の前にトランジション(冬芝から夏芝への移行)を実施するなど、毎年種まきと年間を通じた管理が必要になる。

ポット苗

芝の苗を等間隔に植え、
根や茎の広がりによって芝生を造る方法



2ヶ月後



- 土壌基盤が整った環境であれば、園児や児童でも手軽に植付けができ、イベント等で活用できる。
- 植付け時期は4～7月で、梅雨時期(6月上旬～7月下旬)までの植付けが適期。
- 植付け間隔
 - 30cm間隔(1,100ポット/100㎡)
 - または
 - 50cm間隔(400ポット/100㎡)

芝生の植付け後

芝生を植え付けた後の作業が芝生の生育を促します。

圧着

- ◆土壌と芝生を定着させる
- ◆まいた種の飛散防止
- ◆凸凹した土壌を整える

⇒平らな土壌だと芝刈りがしやすくなり、管理が楽に



目砂(目土)

- ◆凸凹した土壌をならす
- ◆芝生の発芽や根の生長促進
- ◆目の細かい砂を擦り込む
(川砂や、貝殻の入っていない砂場の砂でもよい)



散水

- ◆芝生の生長促進
- ◆植付け後はたっぷり水やり



養生

- ◆芝生保護
- ◆根を定着させる
- ◆養生中も散水・施肥・刈込みを実施

